

北千島(占守島)における

自衛戦闘と停戦交渉

元91師団参謀部作戦情報係
長島 厚大尉の御講話

はじめに

去る5月21日(土)、埼玉偕行会に際して、元91師団参謀部作戦情報係長島厚氏(55期)から、表題の御講話をいただいた。

戦後に語られる大東亜戦争戦史といえは、支那大陸方面と南西太平洋地域の戦史が主で、千島列島や樺太などの北方戦線については、多くを聞く機会が少なかった。

今回、終戦の大詔が渙発されて、すでに停戦準備にかかっていた我が千島防衛部隊に対して奇襲侵攻してきたソ連軍との熾烈な戦闘が行われ、その戦果によって、北海道までも強奪しようとするスターリンの野望を打ち砕いて、国土の保全を全うした占守島防衛戦闘の様相を知る機会に恵まれた。

当日参加できなかった同期生諸兄にも、その内容をお伝えしようと、本稿を起こしてみた。この際、諸兄の理解を助けるために、筆者の手持ちの戦史資料を参考にして、御講話の内容に若干の添え書きをすることとした。

〔記録：吉原 瑞穂〕

(予科7-7・航11-2 渋谷区広尾)



講演中の長島厚氏

占守島の戦略的価値と

防備態勢の概要

千島列島は、北はカムチャッカ半島の南端から、南は北海道まで、延々640海里に亘って縦走して、太平洋とオホーツク海を分離している。これによって、太平洋に進出しようとするソ連艦艇のすべての出口を封鎖することが出来ると同時に、北太平洋方面の米軍の活動に対して制約を与える。すなわち、北方の海空域に対する“にらみ”を効かせる要域である。

占守島は、千島列島の最北端に位置し、カムチャッカ半島に隣接する東西20km南北30km余りの小島である。その戦略的な重要性から、千島防衛の最先端の拠点として第91師団の歩兵第73旅団、第31高射砲連隊、千島要塞砲連隊、第11戦車連隊の主力を骨幹とする2万5千名余の部隊が配備されて、6個の飛行場のほか、幌筈海峡に面する片岡・柏原の両海軍根拠地を抱える要塞陣地となっていた。

ここを守る陸海軍将兵及び民間の産業戦士は、長期に亘って、北海の孤島特有の熾烈なる自然の重圧と、戦況の悪化に伴う情報連絡の困難と増援・補給の途絶などの艱難辛苦に耐えながら、日夜訓練に励み、敵邀撃必勝の闘魂に燃えていた。

ソ連軍の奇襲侵攻と

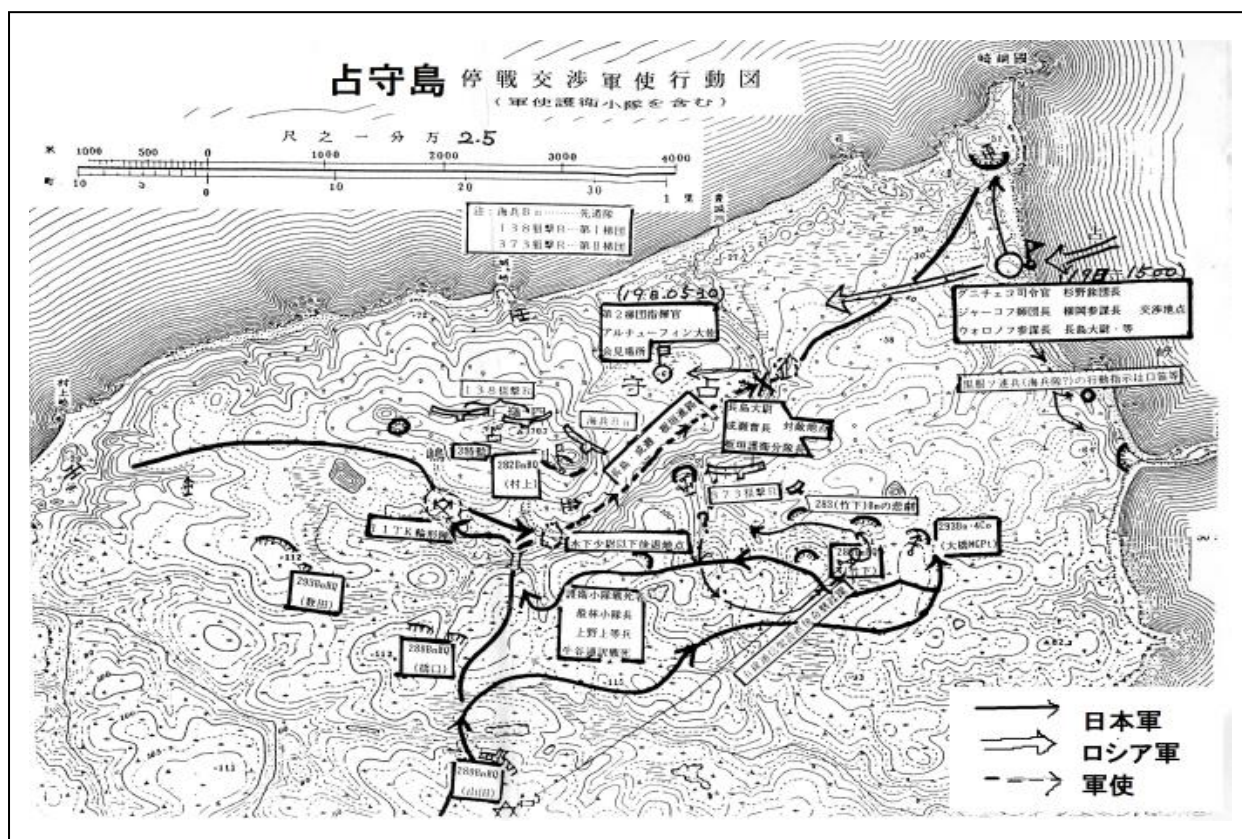
戦闘経過の概要

昭和20年8月16日になって、終戦が伝えられ、翌17日から武装解除の準備に取り掛かった。戦車部隊では、車載の銃砲や無線機の取り外し、装備品等の爆砕と車両の海没の準備まで進めていた。

しかし、8月18日の未明に至って、対岸のカムチャッカ半島南端のロバト力岬のソ連軍から長射程銃砲の砲撃が始まり、国端崎の監視所からも、海上にエンジン音が聞こえる旨の至急の連絡が来るなど事態が急変した。武装解除を準備中の諸部隊は、引き続き、『敵輸送船団らしきものを発見』『敵上陸用舟艇を発見』『敵上陸、数千人』などとの急報に接した。ソ連軍が、竹田浜に上陸してきた。

敵の上陸を察知した日本軍は、急遽戦闘準備を整え、戦車11連隊及び第73旅団と国端崎の砲兵、竹田岬と小泊崎の速射砲と大隊砲が協力して反撃した。同時に、幌筈島からも、所要の兵力を占守島へ急進させた。すでに終戦処理を開始していた各部隊であったが、ソ連軍の奇襲侵攻を受けるや、自衛戦闘のために、敢然と決起し、果敢な邀撃戦闘を展開した。この猛烈な反撃によって、ソ連軍は、大きな損害を受け、初期の戦闘は挫折し、国端崎から小泊崎一帯に後退した。この時期に、ソ連軍の指揮系統は大混乱に陥っていた。

この状況を、ソ連側の資料によると、『8月18日朝、上陸軍は、濃霧を利用して占守島に接近し、その東北部海岸に上陸した。



先遣隊は奇襲に成功したが、後続の主力は、日本軍の猛烈な抵抗を受け、特に、165高地と171高地では、激しい戦闘が展開された。

…上陸軍に対する艦砲支援やカムチャッカの海岸砲台は、国端崎と小泊崎に全火力を集中したが、日本軍の砲台は、堅固に掩蔽され、海上からは秘匿された側防火点であったため、射撃の効果はほとんどみるべきものはなかった。』『上陸軍は、上陸開始早々、部隊指揮の面においても、一大危機に直面していた。…唯一の頼りにしていた無線機が、ほとんど故障して、適時適切な上陸戦闘の指揮・艦砲や海岸砲など支援火力の運用に、重大な影響を与えた。』とある。

この後、双方、陣地の再編成・兵力の増強を図り、激しい攻防戦が繰り広げられた。日本軍は、戦車連隊の投入によって戦力を増強し、戦車連隊長・同連隊指揮班長はじめ各中隊長以下多くの戦死者を出しながらも、敵を海岸線まで圧迫し釘付けにして、敵ソ連の上陸部隊を、一挙に殲滅する態勢を整えつつあった。

このような状況の下に、「戦闘行為を停止し、自衛戦闘に移行」との、第5方面軍からの命令が届いた。

北千島の停戦交渉

軍使拝命から敵軍との接触

方面軍からの停戦命令に接した第91師団長は、『彼我將兵の無益な殺傷を回避すべく、停戦交渉の軍使を派遣する』ことを決意され、そのための軍使に、当時、師団参謀部付きであった長島大尉を命じた。随行者と二個護衛分隊を合わせた20名ほど

の隊員の集合を待って14:00頃出発した。出発に際して、所在の一部將兵からの妨害行為もあったが、それを説得して司令部を後にした。

彼我の銃砲弾が交錯する中を、あるいは匍匐し、あるいは疾走し、あるときは戦車の砲塔に跨乗しながら急行した。この間、敵の集中砲火を浴びて、護衛小隊の隊長以下半数を失った。以後、下士官二名のみを伴って敵指揮官との接触を求めて北上する。夕刻、小哨らしき敵兵と遭遇し、若干の銃撃を受けたのち、拘束されて敵の国端警備隊本部(上陸部隊本部)に至った。

敵將との会見

上陸部隊本部の営庭に座らせられたまま待つこと数時間、19日02:00と思しき頃になって、隊舎内に招き入れられて、少佐以下六名の將校から尋問された。当方から、「停戦交渉のための軍使である」旨述べて此処に到った目的を説明した。若干の問答の末、20分ほど歩いて、上陸部隊の前線本部に案内された。待つほども無く出てきた將校が、(案内係の紹介によって)上陸部隊指揮官・狙撃連隊長アルチューフン大佐であることを確認し、師団長からの『停戦文書』を手渡した。時に8月19日06:30頃であった。

停戦交渉の経過 停戦文書を手交し、和やかな歓談を交わしたのち、ソ連軍から派遣される大尉以下六名の軍使一行を案内しつつ、08:30頃、大観台の旅団司令部に帰着した。同行したソ連軍軍使は、「15:00高級軍使と竹田浜で会いたい」と、停戦交渉の意思を表明した。これによって、師団長は、第73旅団長杉野少將に軍使を

下命した。杉野旅団長は、柳岡師団参謀長以下数名の随行者を伴って、14:00過ぎ旅団司令部を出発、竹田浜に到った。定刻、ソ連軍上陸作戦司令官グニチェコ陸軍少将が、ジャーコフ師団長・参謀長ウオロノフ海軍中佐などを帯同して来会した。所要の挨拶を交わしたのち、直ちに交渉を開始した。数合の押し問答の末、会談が終了し、旅団長以下の軍使一行は、19日20:00頃大観台の旅団司令部に帰還した。交渉の内容について、師団長から、「停戦は承知するが、武装解除は容認できない」との意見がでて、翌20日午前、柳岡参謀長が、長島大尉を伴ってソ連軍指揮所に到った。ここで、両名とも、ソ連軍の拘束するところとなった。翌21日朝になって解放されて、ソ連軍将校数名とともに、旅団司令部に帰還した。師団長の指示に基づいてソ連軍将校との交渉を進めて、停戦交渉がまとまった。師団長から、『一切の戦闘行動の停止』を発令され、夕刻に到って、師団の戦闘司令部も撤収して、柏原に帰還した。その後、ソ連軍からの連絡により、堤師団長は、参謀など四名を帯同して、22日14:00頃、片岡湾に入港しているソ連軍警備艦キーロフに赴いて、グニチェコ司令官・ジャーコフ狙撃師団長などと会見し、『降伏文書に調印』し、北千島占守島の自衛戦闘は終結した。

その後、ソ連側から、長島大尉に対して、日本軍の武装解除のため、ソ連軍艦に乗艦して、水先案内と守備部隊からの発砲防止に当たることを求められ、三泊四日の間北千島の諸島を巡って、8月25日昼ごろ無事柏原の師団司令部に帰還し、停戦業務を終了した。引き続き残務整理やソ連軍との

交渉に当たったのち、四ヵ月後の12月8日、ソ連の輸送船に乗って柏原港を出港した。大泊・ナホトカ・浦塩を経て、ウラル山脈を越えて欧ソの収容所を転々としながら、過酷な条件の下での捕虜生活を送り、昭和23年5月8日、舞鶴港に上陸した。



本戦闘の意義

ソ連側の資料には、その作戦の構想を、千島列島を占領するための初期作戦として『占守島東北部に奇襲上陸して同島を占領し、爾後それを橋頭堡として利用しつつ、幌筈島及び温彌古丹島を占領する』ことにあり、『占守島を占領することは、日本軍の北部諸島の全防衛構想を崩壊させ、爾後、この千島列島諸島の占領を可能にする』ことに意義があるとしている。

このようなソ連側の作戦構想は、『北海道東部を占領』するための、初期段階の作戦であったと言えよう。とすれば、すでに武装解除に着手していた所在部隊の将兵が、ソ連軍の理不尽な侵攻に対して、敢然反撃に出て、多くの犠牲を払いながら、ここ占守島の防衛を全うしたことは、つまるところ、北海道本島の防衛を全うしたことになり、戦後の国土再建に甚大な貢献をしたことになる。

この戦闘での我が軍の戦死者は、700

名～800名(370名とも)、ソ連軍は、その数倍(3,000名とも)といわれている。イズベスチャ紙は、「占守島の戦いは、満州・朝鮮における戦闘よりも、はるかに損害は甚大であった。8月19日は、ソ連人民にとって、悲しみの日である」と、報じている。